

我が国の未来を創る基礎研究の推進に関する会長談話
(－ノーベル物理学賞及び化学賞の受賞に関連して－)

2008年度のノーベル物理学賞及び同化学賞において、日本生まれの4人の科学者が受賞されたことを心よりお祝い申し上げます。これらの研究がいずれも30年以上も前に行われた純粋に基礎的な研究であることを認識し、これを機会に中長期的な視点に立った基礎研究の推進の重要性について改めて述べたいと思います。

基礎研究の重要性に関しては、日本学術会議は、本年8月、「我が国の未来を創る基礎研究の支援充実を目指して」(日本学術会議 科学者委員会学術体制分科会)と題する提言をとりまとめました。今回の受賞は、様々な意味で、この提言の内容とも密接に関連するものと考えますので、今一度お読み下さることをお願いいたします。

今回の受賞は、過去の多くの受賞者と同様に、30歳代という若い時代に自由な発想に基づき知的創造活動を行える環境にあったことが重要な要素となっております。すなわち、才能ある若手研究者が、よき師、よき仲間とのコミュニケーションに支えられて、夢とチャレンジ精神をもって、思う存分研究に没頭できる教育研究環境にあったことが大きな要因であると考えられます。

それに対して我が国の現状は、提言でも指摘しましたように、基礎研究及びそれを担う大学・研究機関自体がその基本的な機能を果たす上でさえ深刻な状況に直面しており、早急な対応を必要とする課題が多くあります。加えて、若手研究者自身も、比較的短期間に成果を求められ、従って夢を実現するべくチャレンジをしたいと思いつつ安全な道を選んでしまうことが少なくないと聞くにつけ、その現状が憂慮されます。

基礎研究の推進に向けて抜本的な対策を講ずることは我が国にとって緊急の課題であり、日本学術会議としては、提言で示した基礎研究の充実、基盤的経費による大学・研究機関の支援の強化、創造性を育てる教育体制の整備、若手研究者が夢を持って研究できる環境の整備等、基礎研究の支援充実が早急かつ適切に実現されることを強く期待します。

ノーベル賞受賞を契機に、国民の中で、30年~40年後の将来を見据えた投資として基礎研究の重要性が広く理解され、我が国が真の文化国家として、世界的な学術の発展及び人類の福祉の向上に貢献していくことを心から希望します。

平成20年10月31日

日本学術会議会長

金澤一郎

参考：提言「我が国の未来を創る基礎研究の支援充実を目指して」

(平成20年8月1日 日本学術会議 科学者委員会学術体制分科会)

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-20-t60-3.pdf>